信毎歌壇

米川 千嘉子 選

娘入学の記念の梅は義父が植ゑ四十三年間小鳥は来たる　（小諸市）尾沼美枝子

丈夫な子産まれるようにと父踊りしと我を身ごもりし母の思い出　（松本市）小松　久志

カタクリの咲くを見にゆく友に会ふ場所教へない静かなる人　（千曲市）倉石みつる

さくらさくらさくらさくらよさくら急逝せし元工場長とほろほろ遊べ　（千曲市）関　津和子

富士山の高さの誤差は一センチその一センチに婆は驚く　（佐久市）荻原多美子

溜息をつけば幸せが逃げて行くそうは言ってもしばらく待って　（佐久市）水間喜美子

丁寧に説明すると言ひしのち粛々として進むるとも言ふ　（箕輪町）向山　政俊

児童等が手さぐり捕りし川魚を酒菜に飲みし昔の先生　（上田市）山本　進

手に足に杖になりたる一日過ぎ妻の寝息に安堵し眠る　（長野市）丸山　祐司

名画にはラストシーンに余情ありドロンの笑顔一瞬に消ゆ　（宮田村）金本　牧子

佳作

「菊乃さん」呼びかけてみる　鏡には祖母が居るかに毛染め止めた吾　（松本市）奥　絹枝

使われぬ排水管に根をはりて蒲公英なべて空向く　（駒ケ根市）塩沢　春子

選評　第一首、下句が特に魅力的。孫に対する義父の愛情が梅を咲かせ小鳥を招いてきたような感動がある。第二首、どんな踊りだろう。若い父の必死さのようなものがユーモアとともに伝わる。第三首、人が大勢来るようになるとカタクリが守れない。友の「静か」さは意志を秘めていたのだ。第四首、「元工場長」という一語の響きもリアル。その人の急逝に衝撃を受けたことが歌の調子ににじむ。

小池　光 選

使わなくなった学習机にはカギのかかった引き出しひとつ　（佐久穂町）石田　弘子

我が家から見える浅間が一番と人に言われど朝夕眺む　（佐久市）荻原多美子

信州の冬の寒さに凍死せぬちさき蚕のからだの不思議　（長野市）原田　浩生

上手下手その日によって変る文字自分で褒める今日はいい文字　（岡谷市）山田　丈夫

「ただいまよりスイッチバックいたします」姥捨界隈春真っ盛り　（箕輪町）向山　政俊

雪解けて土手に見え来し犬ふぐり小さき花の大きな命　（飯綱町）坂井　寿男

住職の読経朗々と春彼岸副住職の娘の声和して　（飯山市）柳本　良子

正午告ぐサイレン鳴れば工事場のクレーンも止まり青空高し　（岡谷市）吉池富貴勇

時にまだ風が肌刺す浅き春貫物に出る箇条書して　（長野市）近藤　光子

酒好きで若いもん好き朝風呂好きで出社して来た君はもういない　（千曲市）関　津和子

佳作

ひと冬を越せし喜びしみじみと雪間に芽ぐむ福寿草見つ　（大町市）平林　幸

亡き母の去りしままなるやわらかき西日の部屋をそっと開けみる　（佐久市）佐藤千栄子

選評　第一首、子どもが大きくなってもう学習机も使わなくなった。ふと見れば引き出しのひとつに鍵がかかっている。きっと大事なものを、親にも秘密のものを収めていたのだろう。思春期の心情をよく伝える。第二首、いつの日も立派で輝く浅間山。わが家から見る山容が一番いい。ふるさとへの愛とプライドが感じられる。第三首、これはいかにもその通り、不思議だ。生命の謎である。いのちはすごい。

小島　なお 選

花壇には花が　花には蜜蜂が　保健室にはまた新しい　（大阪府松原市）たろりずむ

十代の特攻兵に子孫なし仔犬とあそぶ写真に見入る　（小諸市）星野　直人

流氷に埋まりて音の消えるたる浜の唯一の音源われは　（長野市）原田　浩生

九州と東京にいる娘らがラインで惜しむパルコ閉店　（松川村）岡　豊村

一円玉瓶いっぱいに父残すひとつふたつの鈕も入りて　（安曇野市）西村　静子

春の日の光を食べるむきたての土佐文旦はつやつやとして　（安曇野市）小村　麻貴

春の日に和尚と電話で話しけり泣くな泣くなと言われ続けて　（茅野市）三好　碧

土手に桜を植えた理由分かったよ根元踏みつけぶらりぶらぶら　（岡谷市）川村　修平

霜柱に押しあげられし球根につぼみ付けおりユキノハナ良し　（岡谷市）山岡　はな

葬儀代ためると笑った母ちゃんが部屋に六千円残して逝けり　（松本市）田中しほす

佳作

霊柩車に遭ひしひと日は春の雪淡く消えゆき人声もなし　（岡谷市）吉池富貴勇

スーパーのレジに相性合う娘いて探して妻はその列選ぶ　（千曲市）たじまたける

選評　第一首、新しい花、新しい虫、そして新しい生徒が保健室に通うことになるだろう。まぶしさがすこし苦しくもある4月。第二首、まだ幼さの残る青年。お父さん、おじいちゃんと呼ばれることは永遠にかなわない。第三首、流氷の雄大な静寂に統べられた浜。唯一、音を発する小さな生命体として立つ。第四首、2月末に閉店した松本パルコ。2人の娘の青春期の思い出が沢山詰まった場所なのだ。